



イケケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 527 回 人を嫌うことと、人から嫌われること

2013.6.2

もう随分若い時の話である。地域の小ボスで、地方議員をしていたあるクライアントがいた。態度も身体も声までがでかく、傍若無人。人に対する配慮はなく、資格のない若者を小童(こわっぱ)扱い。法曹資格(検事)を剥奪された経緯があり、「俺を何だと思っているんだ」とばかり、むごい攻めの言葉を言われっぱなしの巡回指導。うちのスタッフ誰もが会いたくない典型で、ついぞ、私が担当する羽目になって、もう2年にもなっていた。

月1回の訪問の日、朝から足が重かった。「急病」になればいい…と思いつつも、身体だけは元気だった。嫌で嫌でたまらない、苦手な客の代表格であった。

いかに上手に他人と付き合うか、いかに他人を愛するべきか、について書かれた本はたくさんあるが、他人の「正しい嫌い方」という本はあまり見かけない。学校でも、上司でさえも教えてくれなかった。嫌のまま、ずーっと会っていたら、おそらく今流行(はやり)の双極性障害や適応障害になっていたのかもしれない。青春のほろ苦い思い出である。

人を嫌うということは、あくまで「自分が気に食わない」という主観の問題であり、相手が絶対に悪いというわけではない、ということが見えてきた。

実はあの人も、悪人ではないかもしれない…そんな風に思うよう努力した。

しかし聖人でも仏様でもない私は、あの人を好きになれ…とはできなかった。

「世の中で一番美しいことは、すべてのものに愛情を持つことです」、書齋に掲げた、福沢諭吉の『心訓』が、虚(むな)しく響いていた。

人を嫌うことと、人から嫌われること、私の対処法は、いい意味での「開き直り」だったような気がする。まず「私はあの人が嫌いだ」とはっきり自分自身で認めてしまうこと、そうすれば、その人への嫌いという感情は薄れるものだと気付いた。正に、いい意味での「開き直り」である。人と付き合う以上は、嫌われることもあるし、自分が嫌うこともある、ということを前もって覚悟してしまうことであろう。

他人を嫌っているという、自分の心を受け入れられない人こそが、ひねくれた性格になり、他人に迷惑をかけてしまう。相手の嫌いなところは、自分のミラーだ。苦手で嫌いな人が多ければ多いほど、自分も相手からそう見られている。福沢諭吉の真理の如く、人を愛するということは素晴らしいことだが、社会で生きていく上では、嫌いな人とどう向き合うかということも、同じくらいに重要なことだと思う。

「嫌われることもある」とおおらかに受け入れられる人ほど、結果的には多くの人から愛されるのかもしれない…と、この歳になっても、相変わらず開き直って生きている。